

# 科学史技術史通信

特定非営利活動法人  
**科学史技術史研究所**  
田中・山崎・飯田・菊池・道家文庫  
No.25  
2015.4.20

165-0027 東京都中野区野方1丁目2-9番1-B101

Website URL: <http://ihst.jp/> e-mail: [ihst@ihst.jp](mailto:ihst@ihst.jp)

科学・技術の歴史散策（その1）

## 「フェルクリンゲン製鉄所」（ドイツ）

奥山修平

この記事は、私が科学史・技術の歴史をたどり各地を旅した折に、現地の宿で日誌風にまとめた記録（私的にまとめた備忘録）を、ほぼそのまま紹介したものです。

2010年2月18日（木）

今朝は4時起床。昨晚は暖かく、よく寝られた。今回の最大のテーマの一つが、フェルクリンゲンの製鉄所。ケルンからは遠い。この製鉄所は、世界遺産の中で、産業遺産の最初の例である。

朝7時ちょうどに食事。7時55分の列車にのる。ケルンからマンハイム。ここで乗り換えて、ザールブリュッケンへ向かう。この駅からさらに一つ目がフェルクリンゲン。ここに、その名を冠した製鉄所がある。オットー・ヨハンゼンの『鉄の歴史』（Geschichte des Eisens）は製鉄史の古典的名著として知られるが、このフェルクリンゲンこそ、ヨハ



ンゼンのいた製鉄所である。第一次世界大戦後、ドイツの製鉄所の一部がフランスに割譲される不遇の時に著したのが『鉄の歴史』であった。

駅から大きな工場が見える。錆びた鉄の色が目に入る。わくわくもするのだが、この赤さびが滅びを想起。近代の産業遺跡の悲しさか。近代以後の人間の作った物の移ろいやすさというべきか、20年近く前にイギリスの産業遺跡を見たときにも同じ思いを抱いた。駅から見える遠く工場の様子が、釜石製鉄所の高炉が爆破によって崩れ落ちた時の光景を思い出させる。幾分、気が重くなるが、気合いを入れてゴー！



さて、この製鉄遺跡。産業遺産であると同時に催



科学・技術の歴史散策（その2）

## 「エッセンのクルップ邸と ツォルフェライン工場」（ドイツ）

奥山修平

2010年2月19日（金）<sup>1</sup>

会員短信

日野川所員 拓殖大学教授を定年

去る3月、本研究所の日野川所員（拓殖大学教授）は、拓殖大学を定年退職されました。退職に際しての最終講義は、「原爆と原発は同根の技術」と題して、2月18日拓殖大学文京キャンパスにて行われました。この最終講義は、拓大の人文研究所の紀要に投稿されたそうですので発行されましたら、またお知らせします。このほかに、「カリフォルニア大学の戦時体制—研究契約を中心に—」と題する研究ノートを、同人誌『イル・サジアトーレ』に投稿されておられるそうです。

また、この3月には、バークレーに2週間滞在、研究調査を行い、今後も研究継続される体制を構築されつつあるようです。

なお、日野川所員は、一時体調を崩されておられたようですが、手術後の体調にもようやく自信がついて、退職後の、講義する「声」を失った今は、原稿を書いたり、小さな学習会で話しするなど、無理なくできることを継続しようと思っていますと

<sup>1</sup>本稿は、2012年3月に提出頂いたものです。掲載が遅れ、大変ご迷惑をおかけしました。厚くお詫び申し上げます。

のことです。（編集部まとめ：なお下記の学習会が開催されます。）

4月25日午後6時15分～9時15分

日野川静枝「4.25 第20回被ばく学習会  
原爆 Genbaku 開発史に見る原発 Genpatsu」

場所：文京区アカデミー茗台(めいだい)学習室A

資料代など：700円 文京区春日 2-9-5 Tel 03(3817)8306

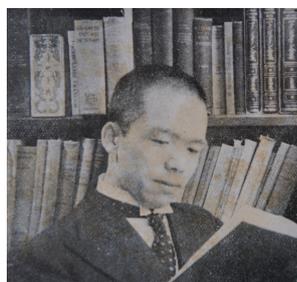
申込み：[anti-hibaku@ab.auone-net.jp](mailto:anti-hibaku@ab.auone-net.jp)

詳しくは <http://www57.atwiki.jp/20030810/pages/224.html>

## 天野清、戦災死70年

4月14日は、「熱輻射論と量子論の起源」などの量子力学史の研究で著名な天野清が、70年前、東京都淀橋区西落合一丁目九番地自宅付近にて東京空襲による爆死の命日です。39歳でした。

本研究所・飯田文庫にも、天野の遺稿『量子力学史』（昭和25年5月20日発行 京都府出版協同組合発行）がある。（元は3年忌を前にした1948年3月に刊行）彼の哲学、文芸、宗教、歴史等其他分野にわたる未発表論文は、残念ながら、あの戦災と共に焼失したのですが、疎開して助かった若干の蔵書のなかにあった未定稿が本書とされます。



天野の業績については、科学史家の菅井準一は、「彼は」「つねに“科学的な”科学史研究をこの国

に打ち建てるために身をもって戦った一人であった」と本書の序に述べています。

また武谷三男は「氏の存在を知ったのは昭和十一